

たつ、ふりく

雄国五郎

わたしにとって あなたにとって 大事なことってな
んだらう

この国にとつて この世界にとつて 大事なことって
なんだらう

どこで 何を飲み食いして 何をするか
わたしは カメさんカードを入れた小さなバッグを肩
に どこへでも行く

上宿通りの観音市 若竹幼稚園のバザー 田原中学校
の文化祭 小峰神社の祭礼 JAデイサービスセンタ
ーの見学会 公民館祭り スーパーの決算セール
市の広報誌とタウンニュースで見たイベントには 緑
のマジックで大きく囲んである
それを切り抜いて バッグに収めておく

今日は 中村トメさんに誘われて「九条の会」へ行く
会場は「あおば公民館」の一階ホールで 受付で会費
五〇〇円を出して名を書くとき レジユメとお茶のペッ

トボトル・和菓子一袋が渡された それは手提げ袋に
入れ

出入り口の脇にある自動給水器で 冷水の紙コップを
手にする

四人掛けの長いすが二列で後ろまで続いているから二
十人以上はいるだらう

席には白衣の人が目立って、場違いへ来た気がする
それでも こちら向きの長いす席の端っこに座ってい
るトメさんと 目を合わせると 落ち着いた

やがて 白衣を着た化粧しない女性が現れ
こちら向きに立った

「わたしは駅の南口にある 木の芽眼科の青木です
『九条の会あおば』は立ち上げて四年になります 今

日は私たち医師の仲間が当番ですが 来年一月の講演
会はおおば文学会の方たちが担当されます 文学・美

術・音楽などの他 八百屋さんなど様々な商店の仲間
の人たち 電気屋さん 土木建築の方もそれぞれ『九

条の会』をつくっています それらをまとめたのが『九
条の会あおば』でして、各市町村のほか、県・全国へ

つながっています 日本の『九条の会』はノーベル平
和賞の受賞候補になつていそうです」

青木さんは 豊かすぎる濃い髪へ白い手をそえて 笑
顔を見せた 不揃な歯並びが動物的だった

その後は 黒縁の眼鏡を掛けた男が 座ったまま資料

さて、どこへ

に目を落とし、憲法の項目を説明した。政府が提案している内容にはこういう意図があり、なにが問題かとか、離れ島で鳴り物が響いているようで、退屈になった。

菓子袋をビニル袋から取り出し、封を切って食べ始めた。どんなにさっぱりした気分になるだろう。

菓子袋を取り出してみる。「和菓子のふるさと、喫茶去」と書いてある。「去」とは何だろう。

裏に説明書きがある。唐の時代の趙洲和尚の言葉で「去(こ)」みんな仲良く健康にの意味という。

袋の中身は個別包みで、最中・ゼリー・落雁・桃山などだ。最中は丸いや四角なものなど。

「桃山」は白砂を丸めたようで、触ったらすぐにくずれる。栗饅頭に似ているが、栗は入っていない。

それがわたしの嫌いな菓子だから、よく知っている。「月餅」みたいにもっと大きな和菓子であることも。

座間の叔父の家で食べたことがある。手にすると粉崩れして大騒ぎをした。それですっかり嫌いになった菓子だから、名前を忘れない。

封を切る気がなくなり、菓子袋を袋に戻し、肩を落としてうつつむく。

「桃山」を砂遊びでつくり、何度もふんづけた。

わたしそのままごとは砂遊びだった。バケツの砂を洗面

器に移して水を少しずつ入れ、食べ物をつくる。おもちゃのような用具は要らなかった。花や木の葉も要らなかった。

何人かで庭の芝生や公園の砂場でままごとをしたが、わたしは何も持たずに行くので、仲間はずれになった。

母と二人は、「ふくだ湯」の物置に住んでいた。物置の半分は床上げがあつて、布団が敷けた。

私の分は母の方へ座布団を三枚くっつけて、ダブル布団になった。

物置の前に井戸端があつて、その側で砂遊びをした。ポンプの上に裸電球が点いていて、夜になつても遊べた。

「ふくだ湯」の女将さんが、座間にいる叔父の知り合いだった。叔父は仲原金一といひ。

駅前から長くバスに乗るのだった。叔父の家では庭の中を小川が流れている。

家に着くと母は、「ハナねえさん」と声を上げて弾むボールみたいな左側の廊下へ飛んだ。

奥さんは、ベッドのある部屋にいた。叔父が玄関に降りてきて、壁に掛けてある木刀を二本

持ち、わたしを外へ出す。大柄な叔父は、木刀を構えて目の前をふさぐ。

それだけで身体の力が抜けて座り込みたくなつた。

それでも立ち向かうと 叔父が額から血を流した
ガーゼを当てて手当がすむと 三人は笑ったが

わたしは 外へ飛び出してしまった

髪結いで座ってばかりいる小柄な母と違って 叔父は
肩も腹も大きかった

わたしに弟妹はいなかったが 母には弟がいたのだ

「ハナねえさん」が北海道からきた人であり 二人は
同じ小学校に勤めていたのだそうだ

「この人はレッドページになっても 主義を換えない
で議員を務めたのよ」

「ハナねえさん」は 背筋を伸ばして演説した

「広島・長崎の上に 沖縄まで乗っ取って この辺も
飛行機が飛ぶと ガラスから火花が飛び散ってな」

「いつか仕返しをしなきゃってね この人はきかない
んだよ」

聞いてみると、怖かった 何のことかわからなかった
が 身体がひんやりした

「仕返し」は知っている 意地悪をされたら仕返しに
履き物を隠したりする

誰が隠したかわかれば その仕返しがある 何度もそ
れをしあったらどうなるか

叔父の家から帰るときには いつも米や野菜をもらっ
てきた

わたしの背中の米は重かったが 白い飯が食べられる

のだから 気にしなかった

母がいなくなつてからは わたし一人で行った

叔父が九十過ぎて亡くなった 電話で知らせがあつて
告別式の日に行った

庭の小川で手洗いをして 家を見ると 窓は白いカー
テンが引いてあり 玄関はもちろん開かなかつた

隣の家も留守だつた バス停のあるスーパーで 寺を
聞いてもわからなかつた

その日の夕方 ようやく電話が通じた
翌日 初めて仲原家の菩提寺へ行つた 九十になつ

て腰がよくなつたよ ハナねえさんは言つて
大きな傷跡のある腹を出して見せた

『九条の会』の話をした 米と大根をもらつてきた
屋敷を出るとき 手を合わせ「さよなら」と唱えた

バス停に手を掛けて さてどこへ？

『九条の会』に出たことを叔父に話したかつた
しかし 次回も出るかどうかはわからない

叔父がいなくなつて わたしはどこへでも行ける
膝の痛みもなく 帽子を取つても暑くない

飛行場のある方を向き 素手の木刀を振るつた

さて、どこへ